

〈研究ノート〉

「越境」するサガン鳥栖サポーター

—在日コリアンサッカー選手への応援を通じた他者理解の可能性—

(2025年3月31日受付)

今井祥人 (上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科地域研究専攻)

1. 問題意識

在日コリアンとは、日本の植民地支配に起因して日本に移住した朝鮮半島をルーツに持つ人々、もしくはその子孫のことを指す。彼らは日本社会において、法的地位やルーツを理由としたヘイトスピーチなど、社会的・制度的差別に直面してきた。また、国籍による人種的区分の枠組みによって、在日コリアンの存在そのものが不可視化されている (川端, 2013; 梁, 2018)。本稿では在日コリアンと区別をつけるため、韓国で生まれた人のことを「韓国人」と呼ぶことにする。また、本稿では氏名を在日コリアンは漢字で、韓国人はカタカナで表記する。

スポーツ界ではかつて、野球の張本功や金田正一、プロレスリングの力道山など数々の在日コリアンが活躍してきた。しかし、「単一民族」としての意識が根強い日本社会において、在日コリアンアスリートは民族的・人種的背景を前面に出せない圧力に直面してきた (有賀, 2024)。サッカーでは過去に「浦和レッズ横断幕事件¹」のように、在日コリアンサッカー選手が差別の標的となる事例も見られる。

一方、在日コリアン選手を応援することが文化交流や異文化理解のきっかけになるかもしれない。試合会場では、在日コリアン選手の名前入りユニフォームを着たサポーターが選手のチャント (サポーターが歌う応援歌) を歌っている。サポーターが在日コリアンへの応援をきっかけに、その周囲にある社会問題を理解し、「日本人」中心の包摂と排除に基づく排外主義的ナショナリズムを覆す存在となる可能性がある。

2. 先行研究

1) 日本の排外主義をめぐる研究

日本では、排外主義運動の当事者に関する分析が行われてきた。彼らは自ら「普通の市民」と称し、在日コリアンよりも「北朝鮮」に対する顕著な嫌悪感情を運動の根拠としている (小熊・上野, 2003)。また、彼らはインターネットにおける排外主義言説に影響され、運動に加担する傾向にあるとされる (樋

¹ 2014年、Jリーグ浦和レッズ対サガン鳥栖の試合にて、浦和レッズのサポーターが埼玉スタジアム2002内に「JAPANESE ONLY」という横断幕を掲示した。掲示者は差別的な意図は無かったとしているものの、当時浦和レッズに入団した在日コリアンである李忠成に向けたものとも解釈され、社会問題に発展した。

口, 2014 ; 安田, 2015)。

近年では、排外主義の源流となりうる日常実践における曖昧な事象にも注目が集まっている。川端浩平 (2013) は地方の中小企業での日常活動を通じて、人々が新自由主義における不安を回避するために、「北朝鮮」に関する冗談を共有しているとする。川端はこの状況を在日コリアンという「他者」に人々は気づいていないと説明しつつ、他者性を想像する力が求められていると指摘した。このような日常実践の視点に関しては、災害における助け合いの経験 (郭, 2018)、朝鮮通信使の歴史家の活動 (山口, 2024) などの事例からも言及されている。

2) スポーツとナショナリズムにおける在日コリアン研究

国際的なスポーツイベントは「想像の共同体」(アンダーソン, 2007) によるナショナリズムを駆り立てる重要な装置として機能する (菊, 2015 ; 権, 2021) 一方で、非ナショナルなものを排除する傾向にある (姜, 2003)。

スポーツ報道における在日コリアンは、日本のナショナリズム理念に都合良く取り込まれるように語られている。オリンピックでは、在日コリアンは日本に都合の良く「自己化」される一方、そうでなければ「外国人」として「他者化」される (阿部, 2008 ; 金, 2010)。

一方で、在日コリアン選手の報道は日本と他国を跨ぐ活動によって、国家的意識を解体する可能性を含んでいる。鄭大世 (チョン・テセ) のように、韓国国内リーグへ挑戦し、「北朝鮮」代表への参加を報じることで、彼の存在によって読み手に「脱植民地的思考」をもたらすことが期待される (Cho & Kobayashi, 2019)。

3) サポーターにおける人種差別の研究

サポーター研究は、社会学を起点にヨーロッパを中心として展開され、人種差別に関する複雑な問題を議論してきた。黒人選手に対するサポーターのまなざしを指摘しているのは Back (2001) らの研究である。白人サポーターが選手に求めるのは白人労働者男性に共通する屈強でたくましい身体性である。その身体性にそぐわなければ、同じチームであっても、黒人の特徴とされる細身の体格を理由に、選手が排除されてしまう場合がある。

有元 (2003, 2020) はサッカーの追求が組織力を主とする「日本人らしさ」の追求と化しているとする。また、サッカーを語る日常性は人種や国民を再定義し、包摂と排除を生み出している場となっていると指摘する。

以上のように、先行研究から、スポーツにおける日本のナショナリズムにおいて、在日コリアンが「日本人」に都合の良いように語られる可能性がある。また、スポーツにおけるナショナリズムの議論は、国家代表における議論に留まる傾向にある。さらに Jリーグの応援という観点から、在日コリアンに対する

包摂と排除のまなざしに着目した研究は管見の限り見られなかった。スポーツにおける応援をサポーターによる日常的実践であるとした時、その実践の中に日本における排外主義的ナショナリズムを見直す機会があるのではないかと考えられる。

4) 日本サッカーにおける在日コリアンの位置づけ

ここでは日本のサッカーにおいて、在日コリアンがどのように位置付けられてきたことを示すため、先行研究として在日コリアンサッカー史について整理する。在日コリアンのサッカー活動は各時代の社会的状況を反映しており、当事者たちは包摂と排除を経験してきた。

① 戦前～1945年の朝鮮サッカー

1910年の日韓併合前にも、1905年に日本が外交権を奪うことで設置した韓国統監府の「武断統治」によって言論や集会を厳しく統制していた。1907年には「集会取り締まりに関する件」を交付し、政治的集会を禁止にした(加納, 2001)。19世紀後半に外国人宣教師や教師によって広まったサッカーも「集会」に当たるとして弾圧の対象になった。京城(ソウル)の培材学堂(現・培材大学)に白色の蹴球門(サッカーゴール)が設置されていたが、白色が「白衣民族思想」を連想させることから、黒色に塗り替えられた(加納, 2001)。

1919年の3.1独立運動以降、朝鮮総督府は「文化政治」へと政策を転換した。「内鮮融和」政策のもと、朝鮮人に対する文化・教育・スポーツに関する規制が緩和された(徐, 2000)。「全国大会」では、朝鮮代表として京城や平壤の学校や社会人チームが出場し、優秀な成績を収めた。大会において、「日本人」チームとの対戦に勝利することで朝鮮人の民族的自負心を目覚めさせ(金, 2009)、サッカーは朝鮮民族にとって「民族的スポーツ」と位置付けられた(西尾, 2003)。

1936年のベルリン・オリンピックでは、朝鮮人を日本代表として参加させることで「内鮮融和」が強調された。サッカーでは、金容植(キム・ヨンシク)と金永根(キム・ヨンゲン)が日本代表に選出されていた。しかし、朝鮮人が選手選考の中で冷遇されていたとされる。前年、明治神宮大会と全日本選手権大会で、全京城蹴球団が優勝しており、朝鮮から7人の名前が日本代表候補に挙げられていたが、選ばれたのは先述した2名のみであった²(藤井, 2002)。当時の「内鮮融和」は同化政策でありながら、「日本人」と「朝鮮人」の優劣関係が維持されていたと考えられる。

② 朝鮮学校のサッカー部

戦後の日本社会では在日コリアンの中でサッカーが盛んに行われていた。

1946年10月に、日本植民地下で奪われた朝鮮語と文化を保持するために設立された東京朝鮮中高級学校(以下、東京朝高)は1953年にサッカー部を創部した³。当時は「都立」の管轄だったため、1954年に

² 当時、選手選考にあたって関東大学リーグを重要視していた(日本サッカー協会, 2023)。

³ 1949年、朝鮮戦争の迫る中、「北朝鮮」を支持する在日コリアンに危機感を覚える中、日本政府は10月に「学校閉鎖令」を発令した。朝鮮学校を閉鎖させ、その生徒を日本人学校に転校させるも、児童同士の衝突や日本人学校の定員超過などの混乱を生じさせたことで、文部省は「公立化」を「暫定的処置」として認めた(崔, 2018)。

全国高等学校サッカー選手権大会に出場し、ベスト4の成績を収めた。しかし、1955年に東京朝高が私立化し、「各種学校」と位置づけられたことで、全国高校体育連盟は1955年より一切の公式戦出場を認めなくなった。

1990年、大阪朝鮮高級学校女子バレーボール部が大阪府内の公式戦への出場を拒否されたことをきっかけに、朝鮮学校の公式戦参加を求める運動が全国に広まった。これにより、日本サッカー協会は1995年の全国高校サッカー選手権から、各種学校・専修学校の出場を認め、朝鮮学校は出場できるようになった。

以上のように、朝鮮学校のサッカーの活動は常に国籍やルーツによる排除の現実と直面し、公式戦の活動が制限されていた。

③ Jリーグの在日コリアン

1993年よりJリーグが開幕すると、在日コリアンの選手たちはプロを志すようになった。しかし、在日コリアンとして活動するには乗り越えなければならない制度的な壁があった。その一つが、現在の「日本サッカー協会公式規程」の第76条にある「外国籍扱いしない選手」、いわゆる「在日枠」である。この制度は、外国籍を持っていても日本の学校を卒業していれば、日本国籍選手と同等に扱うというものである。ただし、「一条校⁴」の卒業が条件であり、かつ1チームにつき1人までという制限が設けられている。「各種学校」である朝鮮学校の場合、高校卒業認定資格を得るために別の学校に同時に通う必要があり、朝鮮学校出身の選手たちは負担を強いられる。川淵三郎は「在日枠」を在日コリアン選手に対する特別な配慮と述べている（慎，2013）。しかし一方で、彼は朝鮮学校出身選手について、「日本を敵視するような偏った教育を受けている」（河崎，2002: 279）と発言している。

サガン鳥栖を例にとると、主力として活動してきた在日コリアン選手・監督は3人である。金明輝（キム・ミョンヒ）や梁勇基（リャン・ヨンギ）などの選手が挙げられる。そして、朴一圭（パク・イルギュ）は2020年から2024年までクラブの正ゴールキーパーとして活躍した。彼は幼稚班から大学校まで朝鮮学校に通っていた。サガン鳥栖では中心選手として活躍し、ゴールキーパーとしてもリーグ屈指の実力を持つ。2022年には日本国籍を取得する。前所属の横浜F・マリノスで、韓国国籍を持っていたため、外国国籍選手の登録枠の関係で試合に出場できなかったことが背景にある⁵。

このように、在日コリアンが日本でプロとしてサッカーをするには、社会的・制度的壁が存在しており、それを乗り越えなければならない現実がある。

3. 研究目的及び分析枠組み

本稿では、サッカー・サポーターの応援という日常実践を手掛かりに、在日コリアンという他者への

⁴ 学校教育法第1条学校のことを指す。一条校は文部科学省が「教育課程の基準」として公示する教育要領・学習指導要領に基づいて定められている。

⁵ 2019年、アジアチャンピオンズリーグにおいて、外国籍選手の登録人数は3人までとされており、朴一圭は韓国国籍を所持していたことから登録から外れてしまっていた（サッカーマガジン，2020）。

認識を明らかにする。そのため、サポーターはいかにして在日コリアンのルーツを理解するのかを明らかにする。先行研究では、日本の排外主義を乗り越えるための視座が提供されており、ヘイトスピーチに対抗するため社会運動に限らず、スポーツを通じて「他者」を捉え直そうとしている。その中で、在日コリアンが国境を越えて活躍する姿が報じられることで、東アジアにおける植民地主義的な思考の枠組みから脱却する可能性が示唆されている。しかし、これらは分析対象が国家代表の報道に限られていた。

サッカー・サポーターに関する研究では、様々なレベルの社会コミュニティで選手に対する包摂と排除をめぐる議論がなされている。その基準は人種と選手の身体性に加え、クラブ・チームが共有する集合的アイデンティティへの親和性も含まれる。ただし、日本における人種と身体性をめぐる包摂と排除の研究はヨーロッパ出身選手に対する他者のみにとどまる。在日コリアン選手をめぐる自己と他者の語り分けは異なる傾向を示すと考えられる。以上の点を踏まえ、本稿はサッカー・サポーターに着目し、在日コリアンという日本社会で周縁に位置づけられる他者へのまなざしについて明らかにする。

本稿では他者理解という概念を用いて議論する。他者理解とは、他者と向き合う際、自分がこれまで囚われていた常識を自覚し、その知己が持つ問題性を考えながら他者を認め、日常的な行動を適切にふるまうための意識や行為を身に着けることである（好井，2015）。この概念を用いることで、サポーターが応援を通して在日コリアンという他者と出会い、従来の常識を問い直し、差別問題への解決へと向かう可能性を議論する。

以上から、本稿の問いを2つ提示する。

- ① サポーターから見て、在日コリアン選手の他者像とは何か。
- ② どのようなサポーターが他者理解を実践しているのか。

前者は、サポーターの語りの中での在日コリアンの他者像に着目する。ローカル・クラブでの在日コリアン選手の印象について聞くことで、サポーターが在日コリアンを他者とする基準と、その背景を明確にすることで問いを明らかにする。ローカル・チームを応援するJリーグのサポーターにとって、在日コリアン選手はナショナリティによる単純な「自己」/「他者」の区分に収まらないと考えられるためである。そこには、先行研究でも言及されているクラブによる集合的アイデンティティに基づく、「自己」と「他者」の線引きが存在すると思われる。サポーターの他者に対するまなざしをさらに理解するために、「自己化」、「内なる他者化」、「他者化」に基づいて分析する。「自己化」はサポーターが在日コリアン選手をクラブにとっての「わがチーム」としてまなざすことを指す。「内なる他者化」は、我々に参入しようとする他者、いわば移民選手や国籍変更選手などに関する言説における他者とする。メディアは日本代表に参加する移民選手や外国籍選手が文化的に溶け込もうとする姿を、好意的に報じる傾向にある。彼らの受け入れ国の文化に溶け込もうとする姿勢をメディアが報道することで、その国の素晴らしさを訴えることにつながる（笹生，2023）。「他者化」はクラブに無関係であることや貢献性がな

い場合に、選手を「非ナショナル」なこととして認識することを指す。以上のように分析することで、サポーターの在日コリアンに対する認識を明らかにする。

後者は、サポーターが在日コリアンを応援する人たちの特徴や、その経緯や具体的な活動を明らかにすることで本稿の目的を果たす。選手個人を応援するサポーターが個人的に彼らを知ることによって在日コリアンのルーツや経験を知ると考えられる。その背景にはサポーターが情報収集をする習慣の中で、在日コリアンという他者と出会うきっかけを得られると考える。そこで、サポーターが日頃から行方情報を収集する習慣を通じて、在日コリアンが可視化されると考えられる。そのうえで、サポーターの中でも選手個人を応援する個人サポーターの活動が単に応援にとどまらず、在日コリアンの歴史的背景について調べる行為によって在日コリアンに対する他者理解が促進することを提示する。

4. 調査対象及び調査方法

本稿では、サガン鳥栖のサポーターを対象とした（表 1）。調査当時、クラブは J1 に所属しており、在日コリアン 4 世のゴールキーパーの朴一圭が在籍していたこと、さらに Jリーグ 60 クラブの中で韓国国籍選手が最も多く在籍していたことが理由である。

鳥栖と在日コリアン、ないしは朝鮮半島との関わりは、現代において、サガン鳥栖を起点としているとの見方ができる。2011 年、クラブを初めて J1 に昇格させたのは元韓国代表の尹晶煥（ユン・ジョンファン）監督（以下、尹監督）である。その他、金民友（キム・ミンウ）がクラブで初めて国家代表に選ばれ、クラブキャプテンを務めるなど、韓国人選手はクラブの中心として活躍してきた。

調査ではサポーターへの聞き取り（ZOOM によるオンラインを含む）とフィールドワークを実施した。フィールドワークでの声掛けや雪だるま式標本法によって知り合ったサポーターに対し、ライフストーリー・インタビューを行い、サガン鳥栖サポーターになった経緯や在日コリアンに関する認識を聞き取った。

フィールドワークでは、ホーム、アウェーの試合を問わず、ゴール裏やサガン鳥栖に関わりのある佐賀県鳥栖市の施設などを訪ね、サポーターの行動の特徴を観察し、他者理解の実践を明らかにした。

表 1 調査対象としてのサガン鳥栖サポーター

名前	年齢	性別	サポーター歴	在住	備考
A	20 代	女性	約 10 年	佐賀県神崎市	朴一圭のユニフォームを着て応援している。試合後のスタジアムで声をかけたことでインタビューを行った。
B	20 代	男性	約 10 年	佐賀県佐賀市	大学院生。小学生の時より李忠成のサポーター。

C	40代	女性	約3年	佐賀県鳥栖市	金明輝、梁勇基を個人的に応援している。金明輝が2021年にサガン鳥栖の監督を退任したこともあり、現在は応援していない。
D	20代	男性	約5年	佐賀県嬉野市	フェルナンド・トーレスをきっかけとしてサガン鳥栖を応援し始めた。
E	40代	女性	約5年	佐賀県佐賀市	自営業を営んでおり、2018年よりサガン鳥栖を応援している。
F	10代	男性	約3年	福岡県大野城市	福岡県の大学に通う大学生。サガン鳥栖を応援していなかった時期もある。
G	40代	女性	約10年	佐賀県嬉野市	家族が応援をしていた影響でサガン鳥栖を応援し始めた。
H	50代	男性	約20年	佐賀県嬉野市	前身クラブとされる鳥栖フューチャーズの時代から応援している。
I	20代	男性	約5年	佐賀県佐賀市	Jの観戦をきっかけにサガン鳥栖を応援し始める。
J	20代	男性	約5年	東京都	小学生の時よりサガン鳥栖を応援している。

筆者作成

5. 結果と考察

1) サポーターの語り分け

ここでは、サガン鳥栖サポーターが在日コリアン選手に対して「自己化」、「内なる他者化」、「他者化」という語り分けを行うことで、他者像を明らかにする。これにより、サポーターにおける在日コリアンに対する他者像が立ち現れる。

① サガン鳥栖サポーターからみた「自己化」と「サガン鳥栖らしさ」

サポーターが在日コリアンを「自己化」をめぐる語りに着目する。「自己化」とはサガン鳥栖サポーターが在日コリアン選手をサガン鳥栖という「われわれ」意識に包摂していることを指す。サポーターは在日コリアン選手について語る際、韓国人選手を同一視する傾向にあった。

20代男性のJは朴一圭が2020年に入団したことを受けて、「在日コリアンに関してこれまで知っていたか」という問いに、以下のように語る。

「2016-2017 シーズンぐらいまでいた尹(晶煥)監督だったり、金明輝監督だったり。多分 J2 時代とかも安庸佑⁶ (アン・ヨンウ) とか色々韓国人の選手とかいらっしやって。概念を知ったっていうのはどのタイミングかわからないけど、割と身近な存在として在日韓国人は認知してたかなとは思いますがね。

〈中略〉

朴一圭が入ってきた時もそんなにハードルを感じることもなく、なんか特別視してたわけでもない、私個人としては特別視してたわけではなかったですね。」

(2024 年 4 月 16 日 ZZOOM にて)

ここでの「在日韓国人」とはオールドカマー、ニューカマー双方を含む。J は彼らをサガン鳥栖を支えてきた存在として語っていた。

B は小学生の時に尹監督や金民友が活躍しており、はじめから韓国人選手の存在に親しみを持っていた。「小学校くらいの時。J1 に上がる試合も観てますし、その時くらいから、ちょうど尹晶煥監督もいたし、金民友選手とか呂成海 (オ・ソンヘ) 選手とかが結構活躍してた時期くらいからのファンで、特別韓国籍の選手だからとか抱いた感情は特になくて。サガン鳥栖のために、戦ってくれているっていうイメージでずっと見て来たので。朴一圭選手が来た時も別に、最初在日ってことも全然知らなかったんですけど、それ聞いて特別何かを思う事はなく、マリノスで優勝に貢献してるキーパーが来てくれてるし、まあ嬉しいっていう。普通にその気持ちの方が強かったですね。これからサガン鳥栖の正ゴールキーパーになってくれるだろうから。」

(2024 年 5 月 9 日 ZZOOM にて)

B にとってもクラブにもともと韓国人選手が在籍していたという印象を持っており、常に身近な存在だった。そのため、在日コリアンの選手が入団しても差別的感情を抱いていない。

F はゴール裏で応援する 10 代の大学生である。「J1 昇格時、彼は小学生でありながら当時のメンバーとそのフォーメーションを覚えていた。そして、金民友のことを以下のように語っている。金民友とか、それこそ僕らのヒーローですよ。金民友は、2016 年の退団スピーチ⁷とかもすごい。あれから僕は鳥栖の歴史が止まってると思ってるので。」

(2024 年 8 月 6 日 福岡市内にて)

2016 年までキャプテンを努めていた金民友はエース番号となる 10 番を背負い、チームを牽引していた。鳥栖の歴史が「止まった」と認識している F は、彼もクラブの歴史を牽引した選手として認識してい

⁶ 韓国出身。韓国国籍を保持。2014 年アジア競技大会にて U-23 韓国代表に選出されている。サガン鳥栖には 2017-2020 の間在籍していた。

⁷ 2016 年シーズン最終試合後、駅前不動産スタジアム(当時、ベストアメニティスタジアム)で退団スピーチを行った。日本語で書かれた手紙を読み上げながら号泣した。

た。選手や監督として活躍してきた在日コリアン選手と韓国人は同一視され、サガン鳥栖に貢献している
と見なされれば、「自己化」されていた。これらはサガン鳥栖を自らのコミュニティと考えたとき、「他者」
と考えられている在日コリアンを「ヒーロー」として迎え入れている発言が「自己化」の証左である。

以上から、サポーターは在日コリアン選手について語る際、韓国人選手や監督を同一視する傾向にあっ
た。

② 「内なる他者」としての朴一圭

ここではサポーターの朴一圭に対する「内なる他者」としてのまなざしを明らかにする。調査当時、朴
一圭はサガン鳥栖の中心選手として在籍しており、ゴールキーパーとしての実力とチームを牽引するリ
ーダーシップを発揮していた。彼はリーグでも実力派ゴールキーパーとしてサポーターから高く評価さ
れている。その点で、朴一圭が「サガン鳥栖らしさ」を体現する選手として「自己化」されている傾向に
ある。

一方で、日本国籍取得の話題において、サポーターが朴一圭を日本社会における「他者」とみなす語り
が見受けられた。D はサガン鳥栖への応援を通じて在日コリアンの存在を知ったサポーターの一人であ
る。朴一圭が入団した当時は在日韓国人として認識したものの、彼が日本国籍を取得したことを受けて、
在日コリアンだと知った。サポーターの間では、朴一圭が韓国国籍だった時に、日本代表選出の噂が広ま
っていた。

筆者の聞き取りを通じて、在日コリアンの存在を知ったサポーターもいる。筆者が金明輝、梁勇基、そ
して朴一圭を在日コリアンとして一括りにして話題にすると、F は以下のように反応した。

筆者:金明輝とか、梁勇基とかパギ(朴一圭)さんとか、いわゆる在日って言われてる人達なの？

F:在日韓国人。でもパギは日本国籍ですよ？

〈中略〉

F:金明輝も日本国籍じゃないですか、いやあいつ国籍韓国のままかな。

筆者:韓国籍だね。

F:じゃああの人まだ在日韓国人扱いってことですか？

筆者:そういう事だね。

F:うーん、日本語ペラペラですけどね。

(2024年8月6日 福岡市内にて)

この会話の中で、F は国籍によって「在日韓国人」と「日本人」を区別していると思われる。F は「日
本国籍＝日本人」、「韓国国籍＝韓国人」と解釈しているとみられ、金明輝を在日コリアンとして捉えるこ
とに戸惑いを示していた。

朴一圭が日本国籍を取得したことに対して、日本代表に選ばれることへの期待感を示すサポーターも
いた。J はネットニュースで彼の国籍取得を知り、彼が日本またはJリーグでやっていきたいという意志

表明であると解釈した。実際、朴一圭は取材の中で日本代表に挑戦したい旨を述べている（金，2023）。サポーターが「日本人」である立場上、多くの者が日本代表への選出を期待していた。

さらに、朴一圭の日本国籍取得に関連して「日本人らしさ」を評価するサポーターもいた。Fはその一人である。

「韓国っていうと、やばい人もいるよね、みたいなイメージもあるんだけど、パギはめちゃくちゃ日本人よりもしっかりしてるからって僕は思ったから。だから、韓国国籍っていうのに違和感があった。」

（2024年8月6日 福岡市内にて）

このように、朴一圭は韓国人選手像と対照的であることを述べている。Fの考える「やばい」韓国人とは「闘争心」や「日本人」に対する対抗意識などの「野蛮な韓国人」という言説から形成された印象であると考えられる。Fの中の韓国人選手と朴一圭の印象が異なることから、彼を「日本人らしい」としている。

サガン鳥栖のサポーターは朴一圭に対して「日本人らしさ」や国内での活躍を期待していた。これらは「内なる他者」のまなざしであるといえる。サポーターは朴一圭を「日本人らしさ」という好意的な意味で、「内なる他者」として捉えている。「日本人らしさ」は日本の外から来た「日本人らしい」ふるまいをする「他者」に対して使われる表現である。「日本人らしさ」と発言する背景には、元来「他者」であることの裏返しである。「日本国籍＝日本人」と捉えるFが、朴一圭を「日本人らしい」と考えるのも、もともと韓国国籍を持っていたという「他者」の認識からの発言である。つまり、「日本人らしさ」は「内なる他者」の傾向として示すものと解釈できる。

③ 「他者化」される在日コリアンと韓国人

サポーターの語りの中では、在日コリアンに加えて韓国に関連する内容に否定的な見方をする傾向も見られた。

Eはサガン鳥栖サポーターのことを「優しいようで冷たい」と話す。韓国人選手が多いことに対して、Eは周りのサポーターから韓国人選手を獲得することに不満を持っていることを耳にする。

「（韓国国籍選手に不満を持つ人が）いるー！いるのよもう！だからもう私は本当に悲しくなって。じゃあどこの国籍だったら満足なんですかっていうのが、すごくあるんですよ。私の中でいつも。夏の移籍でまた2名、韓国じゃないけれども、選手が入ってきて。そこに対しては何も言わない。なんで韓国で言うの？って思っちゃう。」

（2024年8月28日 ZZOOMにて）

サガン鳥栖には多くの外国籍選手が加入する。2024年シーズンの夏には韓国以外の国から2人の選手が加入している。Eは彼らよりも同シーズンに加入したコ・ボンジョに対するサポーターの批判が多いと感じていた。韓国人の選手が多く在籍しているクラブでも、サガン鳥栖に貢献していないと見なされれば

「他者化」されてしまう。

「他者化」の傾向はサガン鳥栖以外のスポーツの話題でも見られる。2024年、全国高校野球選手権大会で京都国際高校が優勝した。これに対して一部のサガン鳥栖サポーターが「韓国語」の校歌を聞きたくないと不満を漏らしていたとEは語った。

朴一圭が行う社会活動に対しても疑問を抱くサポーターがいた。彼は出身校である埼玉朝鮮初中級学校のグラウンドの人工芝化のために、クラウドファンディングを呼びかけていた。これをめぐり、サガン鳥栖サポーターの中では、支援するか否かで賛否が分かれたという。

Fは「韓国の政治は嫌い」と明言する。Fは小学生の時から日韓関係に悪いイメージしか持っていなかった。彼は小学生の時より、いわゆる「従軍慰安婦」問題や「竹島」の領土問題などを聞いていた。小学生の頃、Fは日韓関係の悪化にも関わらず、スタジアムで太極旗を振って応援している光景に違和感を抱いていた。

「自分が小学校の頃は、違和感はありましたね。元々韓国がどうこういう前に金民友は知ってたんです。この人は海外の選手だっただけでしか認識してなくて、でも韓国との歴史を知って。韓国がある程度ちょっと「えっ、なんか嫌い」という不信感抱くじゃないですか誰しも。その時に「あれ、その人(尹晶煥)、監督だよな」って僕はお父さんに言ったんですよ。「この人、韓国人だよな」みたいな。「俺、嫌いなんだよな」って言ったら「いや、韓国人は全員が全員そうじゃないよな」ってこと言われて、確かにそうだなと思って。もう別と考えましたね。」

(2024年8月6日 福岡市内にて)

このように、サガン鳥栖サポーターの中にもクラブに関連しない話題、クラブに貢献できないとみなされる選手に対して、非ナショナルな面を根拠に「他者化」する傾向が見られた。

ここで見られたサガン鳥栖サポーターによる在日コリアン選手をめぐる語り分けは国家的な枠組みを中心として作用していると考えられる。「自己化」、「内なる他者化」、「他者化」において基準となるのは「サガン鳥栖らしさ」である。「サガン鳥栖らしさ」は日本サッカーのプレースタイルとして語られる国民性言説と重なる。日本サッカーのプレースタイルはメディアを通じて、「組織力」や「タフさ」が伝統的で復古主義的な国民性言説に節合されてきた(有元, 2020)。この点は「泥臭さ」と「走りぬく精神」を特徴とする「サガン鳥栖らしさ」と似ている。このプレースタイルを確立したのが尹監督であるとする、サポーターにとって彼のスタイルは「日本人」の求めるプレースタイルと相性が良い。すなわち、「サガン鳥栖らしさ」は日本の国民性言説を基盤としてサガン鳥栖サポーターによって想像されていると考えられる。

朴一圭に対する「内なる他者化」の視点で見れば、国民国家の枠組みは顕著である。サポーターによって選手の「日本人らしさ」が評価されており、必然と国民国家の枠組みに内包されている。戦後の法的地

位をめぐる在日コリアンの位置づけと同様に、日本サッカーでも彼らは「在日枠」を筆頭に「外国人」としての扱いを受け、公式戦への出場を制限されてきた。朴一圭が外国籍枠の制限により、日本国籍を取得した点を見ても、制度的・勧誘的理由により無意識のうちに帰化を選ばされる「帰化装置」に影響されているとも解釈できる(海老原・千葉, 1999)。しかし、このような背景を理解しているサポーターは圧倒的に少ない。

以上の点を踏まえると、在日コリアン選手に対する認識を通じて、サガン鳥栖サポーターの国民性の視点の可能性を指摘できるといえる。

2) 「個人サポーター」の他者理解

① 情報を収集する習慣

サポーターの情報収集する習慣が在日コリアンの他者理解のきっかけとなることを示すため、ここでは個人サポーター（チームではなく、選手個人のサポーター：以下「個サポ」とする）の情報収集活動に着目する。サポーターはクラブや選手たちの所属歴やプレースタイルなどを調べ、事細かに把握している。こうした活動を通じて、個サポは自身の境遇と異なる在日コリアンの文化に触れていく。

また、海外に移籍する選手や引退した選手の動向を追っているサポーターもいる。インターネットで容易に経歴を知ることができることや、選手自身が SNS などで近況を発信していることから、サポーターにとって選手はより身近な存在となっていると考えられる。

情報収集の過程で在日コリアンの存在に気付く者もいる。G は選手の経歴を確認したことで在日コリアンの存在に気付いた一人である。

「みんな入団する時とかに（朝鮮大学校などの）経歴がバツて出てくるじゃないですか。どここのチームに居ましたって。多分もう最初から知ってましたよ。」

（2024年8月11日 鳥栖市内にて）

Jリーグ公式の選手名鑑では、選手達のジュニアユース（中学生年代）のチームから所属歴を確認できる。朴一圭の場合、「東京朝鮮中→東京朝鮮高→朝鮮大→藤枝(MYFC)→FCコリア→藤枝→琉球→横浜FM」（サッカー新聞エル・ゴラッソ編集部, 2024:124）と記載されている。その所属歴から朝鮮学校ないしは在日コリアンの存在に気づく。

また、在日コリアンと韓国人の選手名の表記の違いから、サポーターは気づきを得ることもある。IとBは名前の表記について漢字かカタカナの表記で在日コリアンと韓国人の違いが分かるという。昨年の選手名鑑に、韓国出身のイ・ユンソンはカタカナで、朴一圭は漢字で表記されていた（写真1参照）。Jリーグでは、選手名の登録に明確な規程はない。カタカナ表記と漢字表記の区別には、選手自身による深い意図はないと考えられる。それでも、サポーターは些細な表記の違いから選手の出自の違いをくみ取っていた。

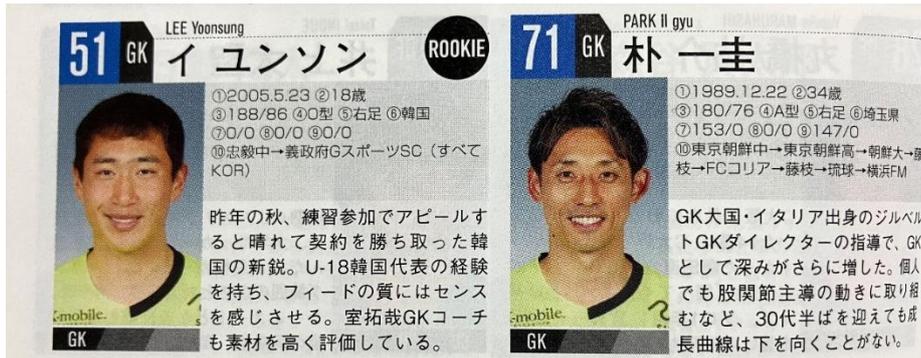


写真1 選手名鑑における韓国人選手と在日コリアン選手の表記の違い

(サッカー新聞エル・ゴラッソ編集部 2024:124)

② 他者理解の実践

ここでは、個人サポーターが他者理解を実践する傾向を明らかにする。一般的なサポーターも選手たちの情報を調べることは前述した。個サポは、在日コリアンの選手たちに対して、さらなる理解を深めようとする行動を起こしていた。そこにはナショナリズムの枠を超えた在日コリアンの理解の深化があると考えられる。彼らは試合時に各々応援する選手のユニフォームを着たり、選手の写真を載せた自作の旗を持参している（写真2参照）。また、選手個人が主催するファンミーティングにも足を運ぶ、いわば「追っかけ」ともいえる存在である。



写真2 在日コリアン選手のユニフォームを着るサポーター達（筆者撮影、2023年8月26日）

在日コリアン選手を応援する過程で、サポーターは選手が直面する悩みや葛藤に共感する傾向があった。その共感が在日コリアンの社会問題を考える機会にもつながり、個サポの中には在日コリアンに対する差別の解消を目指す社会的公正活動を行う者もいた。

i アイデンティティの揺らぎを察する（Aの場合）

Aは朴一圭を応援する個サポとして、選手が自らのアイデンティティに揺らぎがあったのではないかと述べる。朴一圭を「チームを引っ張る熱い人だと思った」（2024年8月11日 駅前不動産スタジアムにて）と語るAはYouTubeで選手が出演するインタビューなどを見て、朝鮮学校での経験や日本国籍取得

までの経緯を知った。A が気になったのは、日本国籍取得に至るまでの心境の変化である。2019 年、朴一圭が横浜 F・マリノスに在籍していた時のチャントは韓国語だった。チャントを聞いた朴一圭は SNS でハングルを使ってくれた嬉しさを述べている(2019 年 11 月 2 日 朴一圭のインスタグラムの投稿より)。この投稿を見たことで、A は以下のように述べた。

「パギさんが鳥栖に移籍したのは外国人枠の関係です。そして、鳥栖に移籍してから日本国籍を取得しています。韓国語のチャントに好意的な反応を示すあたり、パギさんは決して自分の出自に対して嫌悪感を持っているとは思えません。しかし、いくら長くサッカーを続けるためとはいえ、国籍を変更する決断をしたあたりに、どのような心境の変化があったか、個人的には気になりますね。」

(2024 年 8 月 16 日 X のダイレクトメッセージにて)

朴一圭の SNS での発言を受けて、在日コリアンとしてのアイデンティティと国籍取得時の葛藤があったと推察していることが読み取れる。「日本人」や「韓国人」のどちらかに執着せず、その狭間に位置する在日コリアンとしてのリアリティを想像することに繋がっている。朴一圭の「個サポ」であるがゆえに実践する、A なる在日コリアンに対する他者理解であるといえる。

ii 国籍取得の背景を知る (B の場合)

B は小学生の頃から李忠成のファンである。

小学校の時に李忠成の活躍を見て応援するようになった。中学生の時に古田清悟、姜成明が著した『日本代表・李忠成、北朝鮮代表・鄭大世～それでも、この道を選んだ』(古田・姜, 2011)を読んだ。その中で B は在日コリアン選手それぞれが様々な背景を持って国の代表を選択しているということを知った。

「李忠成選手とか鄭大世選手とかのバックグラウンドとかそういうのを自分なりに調べてたっていうのもあって、結構知識はあったんですね。だから (パギが) 入ったからって特別視してたというわけではなかったんですけど。李忠成選手とかの事とかで、確か、北京オリンピックに入るために日本国籍を取ったのも知って、逆に北朝鮮代表を選んでも鄭大世選手とかもいるし、色んな背景があって選んでも分かってるんで。例えば、梁勇基選手も北朝鮮代表を選んでもわけじゃないですか。だからと言って、別に思わなかったし、その気持ちを尊重しようとは思ってるくらいなんで、まあ、理解はある方だとは思ってるんですね。明輝さんとか、勇基選手が来ても別に特別思いはなく、サガン鳥栖の選手として、監督として、勝ってくれるというか活躍してくれたら、それでいいという思いでしかないです。」

(2024 年 5 月 9 日 ZZOOM にて)

在日コリアンがキャリアの中で経験する、国籍と代表の選択による悩みを理解した上での B なる発言だと考えられる。当該書の中では、李忠成の韓国における差別経験⁸が記されており、日本国籍取得に

⁸ 李忠成自身は日本国籍取得前、韓国 U-18 代表に参加した時に選手から「パンチョッパリ (半日本人)」と呼ばれた差別経験を持っている。この経験が日本代表に参加するきっかけにもなったと本人は述べていた (古田・姜, 2011)。

おける様々な背景があることを B は理解していると考え。そのような背景知識があるからこそ、サガン鳥栖に加入した梁勇基に対して「北朝鮮」代表であることを受け入れている。

iii 在日コリアン社会に関わる (C の場合)

元サガン鳥栖サポーターである C は積極的に在日コリアン社会と関わりを持っている。2019 年から 2021 年まで監督としてサガン鳥栖を指揮していた金明輝を応援していた。何度か金明輝と会話をした中で、母校である朝鮮学校について尋ねると、C は彼の「言い淀むというか、あまりそのことについて長くはしゃべりたくないような」(2024 年 1 月 12 日 ダイレクトメッセージにて) 印象が残っていた。それをきっかけに C は在日コリアンについて調べるようになった。雑誌、映画や小説など、在日コリアンに関する情報をくまなく調べた。時には在日青年商工会への参加、朝鮮学校の校長に話を聞くこともしていた。

在日コリアンの日本社会における抑圧の現状を受けて、C は以下の行動に出た。

- ・ 旭日旗の取り下げを申し出る

Jリーグの試合のスタジアムによっては、サポーターが旭日旗を掲げることがある。旭日旗を「晴れの日」と捉えるサポーターと植民地時代を想起させるものとする韓国側の解釈の違いにより、アジアサッカー連盟においても掲示に関して度々議論が起こる。C は、旭日旗は植民地時代を想起させるもので、外国籍の選手が気持ちよくプレーできないと考え、掲出しているサポーターに撤去を申し出ている。

- ・ 在日コリアンに関する自作のパンフレットを配る

「無知は差別につながる」(2024 年 1 月 11 日 ダイレクトメッセージにて) と考える C は、より多くの人に在日コリアンについて知ってもらうために、自作のパンフレットを配布している (図 1)。



図 1 C 自作のパンフレット。A4 表裏になっている (2 枚目の青い文字は筆者記入)

- ・ 朝鮮学校の小学生を Jリーグの試合に連れていく

2020 年から朝鮮学校の小学生を Jリーグの試合に招待する観戦ツアーを自主的に開催している。人格形成に影響を与える小学生の時期に、在日コリアンの活躍を実際に見せることで、子どもたちに未来を担

ってほしいとCは話していた。

3人に共通して見られたのは、「個サポ」が選手の応援をきっかけに、在日コリアンのバックグラウンドを理解する知的実践に及んでいた点である。3人とも在日コリアンの選手をサガン鳥栖の選手としての位相に留めるだけでなく、一人の在日コリアンとして捉えていた。さらに、在日コリアンが日本に移住してきた経緯についてそれぞれ動画、書籍、知人の情報を利用してサポーターは情報を得ていた。

在日コリアン選手を応援する過程では、選手が直面する悩みや葛藤に共感する傾向があった。その共感が在日コリアンの社会問題を考える機会にもつながり、個サポによっては在日コリアンに対する差別をなくそうとする、社会的公正活動も見られた。

以上のように、個サポが在日コリアンに対して他者理解を深めようとしていることが明らかになった。彼らは選手個人に対する応援の中で、選手たちがキャリアにおいて直面する葛藤を理解しようとしている。日本国籍取得におけるアイデンティティの揺らぎ、国家代表選択の苦悩、ルーツを語ることに對するためらいは在日コリアンが経験する「痛み」であり、「日本人」である個サポが経験することのないリアリティである。「痛み」を理解することは、サポーターが選手を国民国家の枠組みに後景化しない等身大の在日コリアンの経験として理解できる。サポーターが選手に対して「民族精神」や「国民文化」の言説に回収されることなく、「生の現場」としてまなざしているといえる（平田，2005）。近年のSNSでの選手個人の積極的発信や、在日コリアンサッカーに関する書籍の増加により、サポーターは選手のより個人的な状況を知ることが可能となり、在日コリアンの他者理解につながっている。

6. まとめ

サガン鳥栖サポーターは、「日本人らしさ」という国民国家的な枠組みにおいて、在日コリアンを語り分けていた。Jリーグのようなローカル・スポーツにおいても、国籍をめぐる制限、プレースタイルに対する国民性など、国民国家の枠組みは随所に顕在している。「在日枠」のほか、外国籍枠の制限、その影響による日本国籍の取得はどれも「日本人らしさ」に帰結している。

一方で、サポーターの他者理解は応援という日常の実践を通じて、個人の問題から敷衍し、在日コリアンの社会問題を捉えていた。それだけでなく、サポーターは在日コリアンを身近な他者としながらも、歴史的・社会的背景にある複雑なルーツを理解している。この複雑なルーツに基づく選手の経験を個サポは「痛み」に変換し、在日コリアン選手の悩みや葛藤に共感する努力をしている。このことで、サポーターは在日コリアンに対する他者理解を実現していた。

サポーターの他者理解の実践が進めば、排外主義を克服しようと行動するようにもなる。他者について知ろうとすることは、自分自身を知ることにもつながる。すなわち、応援を通じて「日本人」サポーターと在日コリアン選手との間に知的互酬性（川端，2016）が構築されている。在日コリアンのことも理解しつつ、自らの「痛み」や障壁にも向き合うことによって、先行研究での「脱植民地的思考」が応援を通じ

て実践されているといえる。

多木 (1995) は優越感や劣等感を感じてきた、愚かなナショナリズムから脱却する可能性にJリーグがその一例を提供していたと指摘する。日本のサッカーが世界的ネットワークに巻き込まれる中、人種の流動的な接触が起きている。この現象はサッカーを越えて、人々の想像力は国家を越えたと多木は述べる。しかし、本稿は選手の流動的な移動や在日コリアンの存在が、サポーターが無意識に求めている「日本人らしさ」を確認する機会となっていることはFの事例にて指摘している。

一方で、サポーターの応援から、日常的実践において排外主義を克服する可能性を照らし出した。サポーターが在日コリアンを身近な存在として捉えつつも、彼らの排除の現実を自分事として考えることで、日本における排外主義的ナショナリズムを克服し、植民地主義的構造を覆す契機となる。個サポは自らが直面しなかった、在日コリアンのリアリティを経験し、それまでの常識を捉えなおそうとしている。塩原 (2017) の言葉を借りれば、彼らは「越境」するサポーターといえる。

しかし、本稿でも明らかなように、在日コリアンに関心を示すのは一部のサポーターに限られるのが現状である。そして、他のクラブに関する他者理解の現状を調査することで、新たな「越境」の可能性を見出すことができると考えられる。本稿では、サガン鳥栖という1クラブに着目して分析を行ったが、Jリーグの各クラブの地域性、クラブの歴史をさらに掘り深めれば、排外主義的ナショナリズムから脱する新たな可能性が見出せると考える。

※本研究は、(一社) 子ども未来・スポーツ社会文化研究所の2024年度研究助成によるものである。

<参考文献>

・日本語文献

阿部潔, 2008, 『スポーツの魅惑とメディアの誘惑:身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』, 世界思想社.

有賀ゆうアニス, 2024, 「スポーツとレイシズム:『中立性』の理念がもたらす困難」, 『世界』, 983, 48-55.

有元健, 2003, 「サッカーと集合的アイデンティティの構築について:カルチュラル・スタディーズの観点から」, 『スポーツ社会学研究』, 11, 33-45.

—— 2020, 「サッカー日本代表と『国民性』の節合」, 『日本代表論:スポーツのグローバル化とナショナルな身体』, せりか書房.

アンダーソン, B, 2007, 『定本 想像の共同体:ナショナリズムの起源と流行』, 白石隆・白石さや訳, 書籍工房早山.

上野陽子, 小野英二, 2003, 『〈癒し〉のナショナリズム:草の根保守運動の実証研究』, 慶応義塾大学出版会.

海老原修・千葉直樹, 1999, 「トップ・アスリートにおける操作的越境からのシークレット・メッセージ」,

- 『スポーツ社会学研究』, 7, 44-54.
- 大島裕史, 1996, 『日韓キックオフ伝説』, 実業之日本史.
- 郭基煥, 2015, 「東日本大震災と〈共生文化〉:排外主義ナショナリズムを『賢明なナショナリズム』ではなく、地域社会の成熟によって乗り越える可能性」, 『社会学研究』, 97, 15-48.
- 加納哲也, 2001, 「サッカー研究(3) - 日本と韓国の関係」, 『神戸大学発達科学部研究紀要』, 9, (1), 239-268.
- 河崎三行, 2002, 『チュック・ダン!:在日朝鮮蹴球団の物語』, 双葉社.
- 川端浩平, 2013, 『ジモトを歩く—身近な世界のエスノグラフィー』. 御茶ノ水書房.
- 2016, 「『当事者』は差別や排除を語るのか?:〈ジモト〉の在日コリアンとともに感じたこと、『差別と排除の社会学』, 有斐閣.
- 姜尚中, 2003, 『反ナショナリズム—帝国の妄想と国家の暴力に反して』, 教育史料出版会.
- 菊幸一, 2015, 「東アジアを貫く時間軸とスポーツ政策」, 『東アジアのスポーツ・ナショナリズム』, 土佐昌樹編, ミネルヴァ書房.
- 木村元彦, 2016, 『橋を架ける者たち:在日サッカー選手の群像』, 集英社新書.
- 2018, 『無冠、されど至強: 東京朝鮮高校サッカー部と金明植の時代』, ころから.
- 2024, 『在日サッカー、国境を越える』, 筑摩書房.
- 金明昱, 2023, 「『国籍変更に後ろめたさはあった』サガン鳥栖 GK 朴一圭が日本国籍を取得した”本当の理由”」, Yahoo!ニュース.
(<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/cb377adef4a01441d0f3a4467ed01ca3df8bdb85> 2024年12月31日アクセス)
- 金明美, 2009, 『サッカーからみる日韓のナショナリティとローカリティ:地域スポーツ実践の場への文化人類学的アプローチ』, 御茶ノ水書房.
- 金賢善, 2010, 「東アジア地域におけるサッカーの交流とナショナリズムの探求」, 京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」.
- 権学俊, 2021, 『スポーツとナショナリズムの歴史社会学: 戦前=戦後日本における天皇制・身体・国民統合 = The historical sociology of sports and nationalism』, ナカニシヤ出版.
- 笹生心太, 2023, 「スポーツメディアに見られる『ナショナリズムの言説』:ワールドベースボールクラシック 2023に関する新聞報道に着目して」, 『体育学研究』, 68, 625-641.
- サッカー新聞 エル・ゴラッソ編集部, 2024, 『Jリーグプレーヤーズガイド2024 ベースボール・タイムズ4月増刊号』.
- 塩原良和, 2017, 「序章 越境的想像力に向けて」, 『社会的分断を越境する』, 塩原良和, 稲津秀樹編, 青弓社.
- 徐鍾珍, 2000, 「斎藤実総督の対朝鮮植民地政策」, 『早稲田政治公法研究』, 64, 195-226.
- 慎武宏, 2010, 『祖国と母国とフットボール—ザイニチサッカー・アイデンティティ』, ランダムハウス講談社.
- 多木浩二, 1995, 『スポーツを考える:身体・資本・ナショナリズム』, ちくま新書.

崔紗華, 2018, 「東京都立朝鮮人学校の廃止と私立各種学校化:居住国と出身者会の狭間で」, 『協会研究』 8, 1-32.

西尾達雄, 2003, 『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』, 明石書店.

日刊スポーツ, 2023, 「【鳥栖】5期ぶり黒字 債務超過24年決算までに解消へ『特例措置なくなる25年中に』社長」, 2023年4月15日. (<https://www.nikkansports.com/soccer/news/202304150000689.html> 2025年3月22日アクセス).

日本サッカー協会, 「歴代優勝チーム一覧|天皇杯 JFA 第103回全日本サッカー選手権大会」. (https://www.jfa.jp/match/emperorscup_2023/history.html 2025年1月24日アクセス)

日本蹴球協会編, 1974, 『日本サッカーのあゆみ』, 講談社.

日刊スポーツ, 「高校サッカー 歴代優勝校」. (<https://www.nikkansports.com/soccer/highschool/winners/> 2025年1月24日アクセス)

樋口直人, 2015, 『日本型排外主義: 在特会・外国人参政権・東アジア地政学』, 名古屋大学出版会.

平田由美, 2005, 「非・決定のアイデンティティ 鷺沢萌『ケナリも花、サクラも花』の解説を書きなおす」, 『脱アイデンティティ』, 勁草書房, 167-198.

藤井誠二, 2002, 『コリアンサッカーブルース』, ケイツー.

安田浩一, 2015, 『ヘイトスピーチ:「愛国者」たちの憎悪と暴力』, 文藝春秋.

山口佑香, 2024, 『「発見」された朝鮮通信使』, 法律文化社.

好井裕明, 2015, 『差別の現在:ヘイトスピーチのある日常から考える』, 平凡社.

ラグズイ, Y., 2020, 「他者との遭遇:ヴィッセル神戸サポーターにおける模倣と真正性の認識」, 『現代スポーツ評論』 43, 109-120.

・英語文献

Back, L. et al., 2001, *The Changing Face of Football: Racism, Identity and Multiculture in the English Game*, Berg.

Bromberger, C. 1993, "Fireworks and the ass", in Redhead, S. (ed.), *The Passion and the Fashion: Football fandom in the New Europe*, Avebury, 89-102. .

Cho, Y. and Kobayashi, K., 2019, "Disrupting the Nation-ness in Postcolonial East Asia: Discourses of Jong Tae-Se as a *Zainichi* Korean Sport Celebrity", *International journal of the history of sport*, 36(7-8), 681-697.